

古文書倶楽部

【発行】

秋田県公文書館

2018.7

第84号

古文書解読講座（七月毎週金曜日開催）への参加申込は六月いっぱい締め切りました。多数の受講申込をお寄せいただき、ありがとうございました。

ロシア軍艦、男鹿沖に来航！

「異人上陸に付届書」他より

安政六年（一八五九）七月一日、秋田藩領内の男鹿半島沖に蒸気船が現れ、翌二日にかけて乗員を門前村の浜に上陸させる大事件が起きた。佐竹文庫の「異人上陸に付届書」（AS三一九・九一四）は、三日に藩に届け出た文書です。事件の一部始終が、現場を見聞した者により臨場感ある筆致で記されています。

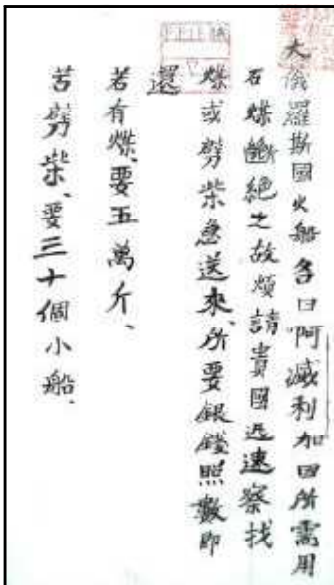
七月一日の八時（午後二時）、男鹿半島の加茂村沖に外国船が突如姿を現しました。未の下刻（午後二時から三時）、船は男鹿門前村の浜から一〇町（約一km）先に碇泊します。帆柱三本、全長四〇間（約七三m）、全幅一四間（約二五m）の蒸気船です。やがて、九人の異人が小船一艘で漕ぎ寄せ、浜に上陸してきました。

リーダー格の者が、書付と一緒に日本の金貨及び外国の銀貨を村人達に差し出し、手真似をしました。門前村の山林を買い取りたい気配です（右金銭を以林買取致様子二相見得申候事）。

男鹿本山から永禪寺の僧がやって来ました。リーダー格は、僧を交渉相手に同じ手真似をし、書付と金貨銀貨を差し出しました。僧は書付だけ受け取り金銭を返すと、山林を売ることが出来ない旨を手真似で伝えます。すると、リーダー格は、浜にたくさん積み重ねていた薪（まき）の束を指差し、残らず買い取りたい様子（無残金銀銭を以買取度様子）を手真似しました。僧も手真似で不可能と答え、薪を五本ほど与えました。異人達は受け取り、蒸気船へ帰ります。

その後、再び異人九人が小船で浜に漕ぎ寄せました。上陸した異人達はまた書付を持参し、売り渡さなければ薪を運び出す様子（是非売渡不申候得者取運候様子）を手真似で示しました。僧が書付を受け取り寺に戻った間、異人達は村人に、船で薪の不足していることを手真似で伝えました。僧が帰ってきて、薪は売れないと手真似で断りました。すると、異人達は前にももらった薪五本ほどを浜辺に投げ捨て、全員引き揚げてしまいました（浜江投捨皆々引取申候）。

そして、異人達はついに実力行使します。まず、三〇人が小船三艘で浜に上陸し、勝手に薪を運び出し始めました。蒸気船の甲板では、大將格らしい者がこぶしを振り上げ何か叫んでいます（大將分様之者本船之上ヨリ拳を揚ケ叫運び出せ（懸売渡不申者無残取運可申））と手真似で配下に命令しているようでした。夜に入り、四〇人余がランプ（硝子之提灯）を三つ点けて上陸し、薪を運び出しました。人家や山林に入り、山に登って四方を見回す者もいました。異人達は、翌二日午の下刻（正午から午後一時）までに、浜に積まれた薪六三束の内五九束



を蒸気船に運びました。その後、海岸見廻と唐船番所の役人に書付を渡しに行き、未の上刻（午後一時から二時）に出帆しています。

上の写真は、「異人持参書付写」（AS三一九・九一五―七）です。「大俄羅斯国の蒸気船・阿滅利加の石炭（石炭）が切れたので、貴国（日本）で石炭か薪を提供して欲しい、代銀は数量に照らして直ぐに返す」との内容が記されています。石炭なら五万斤（約三〇トン）、薪ならば小船三〇艘分という大変な数量を要求しています。異人は、代銀を箱館で返す旨を記した書付も領収として置いていきました。（「異人持参書付写」AS三一九・九一五―一）

事件報告は、秋田藩から江戸と箱館に届け出られました。幕府からは、「今般不慮之儀有之旁何れも油断者有之間敷候得共此上心附候様」との將軍家茂の上意が達せられます。（「異国船取扱二付達書」AS三一九・九一六―一―一）

男鹿沖に現れた蒸気船の正体を明かしましょう。「大俄羅斯国」とは、ロマノフ朝ロシア帝国のことです。また「阿滅利加」は、東シベリア総督ムラヴィヨフ旗艦の外輪コルベツト艦「アメリカ」の漢字表記です。ムラヴィヨフは、アムール川流域と樺太に帝国領の拡大を進めていました。七月二〇日には、旗艦アメリカ以下七隻の艦隊を率いて江戸の品川沖に碇泊します。宗谷海峡を国境とし樺太全土をロシア帝国領にすることを幕府の外国事務掛と交渉しましたが、受け入れられませんでした。

ムラヴィヨフは江戸に向かう途中、秋田藩領内の男鹿門前村で、座乗する旗艦の燃料補給を行ったことになりました。船上でこぶしを振り上げ叫んでいた「大將分様之者」が、ムラヴィヨフ本人か部下の将官だったかはわかりません。

この関係文書は、八月二五日（土）に開催する企画展「秋田と海」で紹介する予定です。お楽しみに。

【柴田知彰】

「救荒食物図解」に見る山菜

当館の書庫を整理していて「救荒食物図解」という山菜について丁寧に記された史料がありました。季節はもう夏ですが、こちらの史料をぜひ知っていただきたいと思いご紹介します。



右に描かれているのは、タンポポです。ここではタンポポについて、「山野に多し又ハ土手川沿等に生せり平素和物等にて食せり 四五月の頃盛也五月中旬にハ花ひらく」と、普段は和え物等にして食べるとあります。イメーじがないう人も多いかもしれませんが、タンポポは花や葉、根に至るまで食べることができます。最大一メートルにも及ぶ長い根のおかげで、他の農作物が不作になるような環境下でも、地中深くにある水分を吸い上げてタンポポは生き残ることができま。そのため、幾度も飢饉に見舞われた江戸時代には救荒食物の一つとしてタンポポの栽培が奨励された時もありました。このように救荒食物として奨励された山菜が「救荒食物図解」(A六一六―一二)では数多く紹介されています。この史料は秋田を代表する明治時代の農業指導者である石川理紀之助が著したものの写しですが、その序文は次の通りです。

昨明治三十年虫害に罹り不作の為め山間の村落大に窮迫していまだ積雪中より蕨の根を掘り飢を凌ぐ者多しそれが救済策を講ぜんこと我県庁より囑托せられ雄平仙由の四郡を巡回して山野沼澤にある処の食物となるべき物を採り其調理法を教へたるを伊藤永助氏が模写したるに簡単なる説明を附して一小冊とし名づけて救荒食物図解といふ

明治三十一年四月

石川理紀之助

伊藤永助とは、理紀之助と共に農村の救済活動に尽力した人物の一人です。理紀之助らは明治三十年の凶作の影響を危惧した県からの依頼で県内各地を巡回し、山野で採れる山菜とその調理法を指導したとあります。実際、この史料には約百種の山菜について、主な生育地や採取時期、調理法等がそれぞれ挿絵と共に、山菜に馴染みが薄い人にもわかりやすく記されています。例えば、次の蕨(ふき)の絵と説明をご覧ください。



ここでは、蕨について「多く山崩等の地にあり山野沢地等にも自生す四五月の頃より食すれども大なるものは五六月に生す 葉を去りゆがき皮を去りて食す又ハ塩漬、干路等にも製する也」と、生育地や生育時期、調理法等が比較的詳しく記されています。

他方、説明が比較的簡潔に記されているもの



もあります。右に描かれた椿の説明では、調理法について「花を摘みて食ふ」とだけあります。私の実家にも椿の木がありますが、野菊のように花を食べられることは知りませんでした。調べてみると、天ぷらや塩漬け等の調理法がありました。

このように、説明文の分量に差はあるものの、飢饉に苦しむ人々にとっては何よりもありがたい情報だったでしょうし、現代に生きる私たちにも勉強になる内容です。また、この史料に載っている山菜を一つずつ見ていくと、段々と食欲も湧いてくるようです。山菜シーズンの旬の時期はすでに終わりましたが、おいしい山菜を食べられる来年の春が訪れるその時を、首を長くして待とうではありませんか。【村山純一】

ふきのとう

みず

竹の子

小豆菜

